とある魔法少女と不幸な転校生

Hiro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある魔法少女と不幸な転校生

【Ｎコード】
Ｎ３１６６Ｙ

【作者名】
Ｈｉｒｏ

【あらすじ】
海鳴市にある私立聖祥大附属小学校に一人の転校生が現われた。
少年の名前は上条当麻と言った。
少女達との出会いは少年に何をもたらすのか。
三人の少女と一人の少年の物語が始まる。

プロローグ（前書き）

今回、子供の上条当麻となのは達のキャラクターをクロスオーバーさせて見たら、どのようになるのか興味を抱き、このような小説を書かせていただきました。
尚、この小説に出てくる上条はなのは達と同い年ですので、原作の上条当麻とは少しばかり性格が異なるかもしれませんので、ご注意ください。
後、更新速度がゆっくりになるかも知れませんが、それでもよろしければお願いします。

プロローグ

少年はどこまでも『不幸』だった。

周囲の子供は彼の姿を見るなり石を投げ、周りの大人もその行為を止めようともしない。

疫病神と呼ばれ、蔑まれ続けた少年。

借金を抱えた男に追い回され包丁で刺されたこともあった。

マスコミに『化け物』扱いされ、カメラに写されたこともあった。

そして、少年は両親を事故で失った。

唯一の味方さえ失った少年は孤独だった。

そんなある日、彼は両親の知り合いと名乗る人物から海鳴市に行くように促される。

九歳の上条当麻は、海鳴市での新たな生活を始めるのだった。

第1話　担任は少女！？（前書き）

相変わらず色々残念ですが、頑張っていきたいと考えておりますので、よろしくお願いします。

第1話　担任は少女！？

電車に乗って海鳴市に向かう少年。
今まで住んでいた場所とは全く異なる海鳴市で新たな生活を始めることになる上条当麻。
しかし、少年には新生活に胸を躍らせたり、不安を抱いたりするといったことは一切無かった。
元々住んでいた場所では、陰湿ないじめを受け続けて、両親を事故で失い、少年は何もかも失った。
海鳴市で新たな生活を送ろうが、自分が疫病神であることに違いは無い。
九歳の子供とは思えない考えを抱きながら、少年は電車の中で深い眠りについた。

同時刻、二人の少女は海鳴市に到着していた。

???「ここが海鳴市…」

???「ああ…」

???「ここにジュエルシードがあるんだね…」

???「フェイト…あまり無茶しちゃだめだよ…」

???「大丈夫…」

海鳴市に着いた上条当麻。
話によると、海鳴市の駅に転校先の小学校の担任が来ている筈なの

だが、それらしき人物は見当たらなかった。

当麻「これからどうしようかな…」

担任の教師が来ていないのに、自分だけが無闇やたらと動くわけにはいかないと考えていた少年は呟く。

そんな少年に近づいてくる中学生くらいの少女が居た。

???「君…どうしたの？」

当麻「あなたは？」

真紀「私の名前は結標真紀よ」

当麻「上条当麻です」

真紀「何だが困っているみたいだったから…」

当麻「実は…」

事情を話した少年に少女は…

真紀「だったらお姉さんが一緒に探してあげるわ」

当麻「で…でも…迷惑を掛けますし…」

真紀「気にしない気にしない♪単なるお節介だから」

半ば強引に協力を申し出る結標真紀に上条当麻は断りきれずに、申し出を受ける。

早速、担任の教師を探すために行動を開始する二人。

真紀「そう言えば、当麻君は何処の小学校に転校するのかしら？」

当麻「私立聖祥大附属小学校です」

真紀「私の母校じゃない！？」

当麻「そうなんですか？」

真紀「ええ。聞き忘れていたけど担任の先生の名前は？」

当麻「月詠子萌先生ですけど…」

真紀「子萌先生なの！？…確かに先生には見えないわよね…」

当麻「？？？」

真紀が言っていることが理解できずに、首を傾げる少年。

真紀「ちょっと待ってね」

携帯電話を取り出し、誰かに連絡する。

真紀「子萌先生に連絡したから、ちょっとそこの喫茶店で待ってましょ？」

当麻「はい」

『喫茶店』

真紀に促されるままに、喫茶店に入る当麻。

真紀「何か食べたいものあるかしら？」

当麻「いえ…」

真紀「子供が遠慮なんてしないの♪すいませ～ん。お子様ランチ一つとイチゴパフェ一つお願いしま～す！」

少年の言葉を無視して、メニューを頼む真紀。
メニューを待つ二人の下に、一人の少女が向かってくる。

？？？「う～。警察の人に勘違いされちゃいましたよ…」

真紀「ようやく来たのね子萌。まぁ…警察が勘違いするのもおかしくないけどね…」クス

子萌「酷いですよ～結標ちゃん～」

当麻「子萌？」

その名前に少年は聞き覚えがあった。担任の名前が確か月詠子萌だった。しかし、目の前の少女はどうみても大人に見えない。

子萌「貴方が上条当麻ちゃんですか？」

当麻「は…はい…」

子萌「月詠子萌です。先程は遅れてしまって申し訳ありませんでし

た」

そう言って頭を下げる子萌。
しかし、少年は子萌の謝罪など全く頭に入っておらず…

当麻「先…生…？」

目の前の少女が自分の担任であることが信じられなかった。

真紀「まぁ普通はそんな反応するわよね」

子萌「こら～！私はれっきとした大人なのですよ～！」

頬を膨らませて怒る子萌の姿だが、全く迫力が無く、寧ろ愛くるしい印象を与える程である。
呆然としている少年だったが、子萌の一言で正気に戻る。

子萌「ともかく…ようこそ！海鳴へ！」

子萌に歓迎されて、どう反応すればよいのか分からずおろおろする少年。
そんな二人の様子を見ながら、微笑む真紀。
子萌が二人の下に現われてから、少しの時間が経ち、三人の前に料理が運ばれる。
お子様ランチを食べる少年とイチゴパフェを食べる少女。
食事が終了した三人は喫茶店を出る。

真紀「さて…私はそろそろ用事があるから此処でお別れだね」

子萌「結標ちゃん。ありがとうございました」

上条「ありがとう…ございました…」

真紀「そんじゃあまたね～」

ヒラヒラと手を振りながら二人の前から立ち去る少女。

子萌「それでは行きましょうか？」

当麻「はい」

二人は私立聖祥大附属小学校に向かう。

時刻は昼前だった。

『私立聖祥大附属小学校』

お昼休みになり、高町なのはとアリサ・バニングス、月森すずかの三人は今日転校してくる予定の転校生について話していた。

なのは「子萌先生が迎えに行ってたけど大丈夫かな…？」

アリサ「まぁ子萌はあの見た目だから…」

すずか「トラブルに巻き込まれていないといいんだけど…」

三人は、子萌の見た目が原因で起きる問題を何度も目撃していたのだ。

車を運転すれば未成年が運転していると誤解され、お酒やタバコを買うときも警察に突き出されそうになった事もあるのだ。

転校生を迎えに行ったからといって、何事も無く帰ってくる可能性

は非常に低いのだ。

すずか「転校生って男子なのかな？それとも女子かな？」

アリサ「後少しで分かるんじゃない？」

なのは「友達になれるかな？」

すずか「きっとなれるよ」

アリサ「嫌な奴じゃないといいな…」

昼休憩が終了して、教室に戻ってくる子萌。

子萌「はいは～い。皆さん静かにして下さいね～」

子萌の言葉に反応して、席に戻る生徒達。

子萌「それでは転校生を紹介したいと思いま～す！」

子萌の言葉にざわめく教室。

子萌「どうぞ～」

彼女の言葉と同時に、教室に入ってくるツンツン頭の少年。

子萌「自己紹介をお願いしま～す」

当麻「上条当麻です。よろしくお願いします」

なのは「（あれ？あの子？）」

なのはは当麻の目に見覚えがあった。

アリサ「何か普通だね…」ボソッ

すずか「ア、アリサ…」

当麻「（何だかこのクラス…女子の方が多い…？）」

少年はそんなことを考えながらも、淡々と自己紹介を済ませていった。

第1話　担任は少女！？（後書き）

淡希「ショタはどこ！？」

主「この時点でアンタはまだ子供だろ！？」

淡希「ショタのためなら時間を越えるくらい余裕よ！！」

当麻「この人は？」

淡希「ショタゲットォォォ！！」シュン

当麻「え？」シュン

主「…次回もよろしく…」

第2話　初めてのフラグ建築

『私立聖祥大附属小学校』

子萌「上条ちゃんの席は、高町ちゃんの隣ですよ～」

子萌の言葉を聞いた少年だったが、肝心の高町という子が分からない。

そのことを知ったアリサは…

アリサ「此処だよ」

なのはの隣の席を指差す。

少年は少女が指差した席まで移動して、お礼を言った。

当麻「あ、ありがとう」

アリサ「どういたしまして」

少年はアリサにお礼を言った後に、席に着いた。

子萌「上条ちゃんへの質問はＨＲが終わってからにして下さいね～」

子萌の忠告を生徒達は素直に聞いて、ＨＲを済ませていく。

そして、ＨＲが終わってクラスメートによる上条当麻への質問攻めが行われた。

「何処から来たの？」

「趣味は？」

「何処に住んでるの？」

クラスメートの質問攻めにおろおろする当麻。

アリサ「そんな一斉に質問しても答えられるわけ無いでしょ！」

当麻「君は？」

アリサ「アリサ・バニングスよ」

アリサの隣に居た二人の少女も自己紹介を行った。

すずか「月森すずかです」

なのは「高町なのはだよ」

三人の少女に続いてクラスメートも自己紹介を始める。

浜面「俺の名前は浜面仕上だ。よろしくな」

ボサボサ頭の少年が自己紹介を行う。

数少ない男子のクラスメートが増えたことで喜んでいるのだろう。

アリサ「早速だけど、色々質問してもいいかしら？」

当麻「うん」

アリサの質問に答える当麻。

クラスメートもそれで満足したのか、それぞれ席に戻る。
なのはは無意識に当麻を見つめていた。
少年の目に見覚えがあるのだが、それが何かは分からない。

アリサ「なのは？どうしたの？」

なのは「ううん。何でもないよ」

授業が終了して、今日から暮らすことになるマンションに向かう上条当麻。
自宅に向かって居た少年は、クラスメートの月森すずかに出会う。
今にも泣き出しそうな表情をしている少女を、お人好しの少年が放っておける筈もなく…

当麻「どうしたの？」

すずか「上条君？」

すずかに事情を話すように求める少年。
他人から拒絶され続けた少年が自ら起こした行動。
少女が『不幸』に巻き込まれているのならば、自分がその『不幸』を背負えばいい。
そう考えた故の行動だった。

すずか「実は…」

自宅で飼っている猫が居なくなってしまったと話す月森すずか。
現在、家の人間に猫の捜索を手伝ってもらっているのだが未だに見つけられないということ。
少女からその話を聞いた少年の答えは決まっていた。

当麻「僕も手伝うよ」

すずか「え…でも…」

当麻「気にしないで」

猫の捜索を手伝うことを申し出る上条当麻。
あまり、他人に迷惑を掛けることが出来ないと考えていた少女だったが、少年の申し出を素直に受けることにした。

当麻「じゃあ僕はあっちを見てくるよ」

少女と別れ、猫を見つける為に動く少年。
猫を探し始めてから、数十分が過ぎる。

当麻「どこにいるんだろう…？」

周囲を見ながら歩く少年。
そこで彼は、道路にいる猫を見つける。
少女が猫の特徴に一致している事から、その猫が少女の飼い猫であることを推測する。
しかし、飼い猫にトラックが迫りつつあることを察知した少年は道路に飛び出す。

当麻「危ない！！」

しかし、少年が道路に飛び出したところで、状況が好転するわけではない。
少年は、猫だけは守ろうと強く抱きしめる。

トラックが少年を激突すると思われたが…

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

無機質な声が響き渡る。
少年に激突するはずのトラックは、何かに阻まれてその動きを止められていた。
何が起きたのか全く理解できない上条当麻は、自分の近くに金髪の少女を見かけた。
その少女はその場から、上条の姿を確認するとその場から立ち去って行った。
少年は少女にお礼を述べようとしたが、少女は既にその場におらず、一旦すずかに猫を見つけたという報告をするために、その場所を離れた。
猫を連れて少女に再び会った少年。
少女は目にうっすらと涙を浮かべながら、猫を抱きしめていた。

すずか「上条君…ありがとう…」

生まれて初めて他人から感謝の言葉を述べられて、動揺する上条。
これが、少年が生まれて初めて他人にフラグを立てた決定的瞬間であることは誰も知る由がない。
感謝の言葉を述べる月森すずかと別れて、少年は気を取り直してマンションに向かう。
唯一の気掛かりと言えば、金髪の少女にお礼の言葉を述べれなかったことだが、今度会った際にお礼を言おうと決意する少年。

『マンション』

マンションに向けて歩き始めて数十分後、少年はマンションに到着

する。
海鳴市が一望できる様な大きさのマンションに、少年は溜息をつく。
貧乏というわけではないが、いかにもな高級マンションに驚きを隠せない少年。
こんな所で、一人暮らしを始めるのだから、少々の不安を覚える。
荷物は事前に、自室に運ばれているらしく少年は自身の部屋に向かう。
そこで、扉の前に着いた少年だったが、その隣の部屋の扉の前に一人の少女がいることに気付く。
その少女こそ、少年がお礼を延べようと思っていた人物だった。

???「あっ…」

当麻「君は…」

思い掛けない出会いに動きが止まる二人だったが、もう一人の少女がその場に乱入する。

???「どうしたんだいフェイト？誰だいアンタ？」

当麻「こ…こんにちは」

もう一人の少女に話しかけられて、挨拶をする上条。
フェイトと呼ばれた少女は、もう一人の少女に話しかける。

???「ふ～ん。なるほどね～」

フェイトの話を聞いて納得する少女。
少年は少女達が話している内容よりも、少女に犬耳がついていることに疑問を抱いていた。

フェイト「どうして君が此処に居るの？」

当麻「今日からこの部屋で暮らすことになったんだけど…」

「「え？」」

少年の言葉が予想外だったのか、動きの止まる二人。
少年に聞こえないような声量で、話した二人はそれぞれ自己紹介を行った。

フェイト「そうだったの…私はフェイト・テスタロッサ」

アルフ「アルフだよ。よろしくな」

当麻「上条当麻です」

二人が自己紹介して、少年も自己紹介する。

当麻「あの時は助けてもらってありがとう」

フェイト「え…いいよ。気にしないで」

どうやら少女もお礼を言われることに慣れていないのか、少しばかり動揺していた。

当麻「あの…お礼がしたいんだけど…」

フェイト「お礼なんて…」

当麻「じゃあせめてこれだけでも…」

そう言って少年は鞄からお菓子を取り出す。
海鳴市に着いた時に、購入したものだ。
少年はそれをフェイトとアルフに渡す。

フェイト「あ…ありがとう…」

アルフ「あたしも貰っていいのかい？」

当麻「はい」

照れているフェイトと喜んでいるアルフ。
そんな二人の姿を見て、少年は心が温かくなった。
海鳴市でも、元居た場所と同じように他人から傷付けられる事を覚悟していたが、海鳴市に来てまだ、一日も経っていないが、皆が非常に優しいということはよく分かった。
海鳴市は少年にとってあまりにも眩しく、そして心地良かった。

フェイト「海鳴市には初めて来たの？」

当麻「うん」

アルフ「親御さんはどうしたんだい？」

アルフの疑問は最もだった。
右も左も分からない状態で、少年を一人で今日から住む場所に向かわせるなど、普通の親ならそんなことをさせる筈はない。
アルフの疑問を聞いた上条当麻の表情は少しばかり暗くなった。

当麻「お父さんとお母さんは居ないんだ…」

アルフ「それはどういう…」

当麻「ちょっと前に事故でね…」

フェイト&アルフ「「！？」」

予想外の言葉に、フェイトとアルフは驚愕する。

フェイト「ごめんね…」

アルフ「悪かったね…」

当麻「ううん…」

空気が重くなり全員が黙る。
そんな沈黙を破ったのは、アルフだった。

アルフ「ま、まぁとにかくこれからはお隣さんってことでよろしく！！」

アルフが無理やり明るく振舞い、フェイトと当麻の二人も明るく振舞う。
二人と別れて、自室に入った少年は鞄から写真を取り出す。
そこに写っていたのは、笑顔の両親と上条当麻だった。
フェイトとアルフの二人も自室に戻っていた。

アルフ「親がいない…か…」

フェイト「…」

アルフ「どんな気持ちなんだろうね…」

彼女達も、少年と同じく海鳴市に初めて訪れたのだが、少年とは異なり明確な目的がある。
本来なら少年の事など、気にしている余裕は無い。
しかし、少年が見せた寂しそうな顔が彼女達の脳裏に焼きつく。
それぞれの思いを胸に抱き、少年達は明日を迎える。

第2話　初めてのフラグ建築（後書き）

御坂「あいつが子供になったって！？」

主「そうだけど？」

御坂「あいつはどこなの！？」ビリビリ

主「ちょ…放電してるよ！？」

御坂「とっとと教えなさい！？」

主「結標さんが連れ去りました…」

御坂「何ですってぇぇ！！！」ドォン

主「ぎゃぁぁぁ！！」

第3話　暖かな食卓

翌日の放課後、月森すずかはアリサ・バニングスと高町なのはに昨日の出来事を話した。
少年の事を語るときの少女の頬が少しばかり赤かったことには、二人とも気付かなかった。

アリサ「意外と親切なのね」

すずか「うん」

なのは「そんなことがあったんだ」

アリサ「暗そうな雰囲気だったから薄情だと思ったけど、そうじゃなかったのね」

なのは「ア…アリサちゃん…」

少女達が上条当麻について話している頃、上条当麻は浜面仕上に小学校の屋上に呼び出されていた。
少年は暴力を奮われるのかと考えていたが、海鳴市に来る前の彼にとっては日常茶飯事だったので、特に気にするほどのことでもなかった。
屋上に到着した彼を待っていたのは、浜面仕上ただ一人だった。

仕上「来たか」

当麻「何の用？」

仕上「まぁちょっとこっちに来いよ」

少年の言葉に従う当麻。
浜面に呼ばれた位置まで移動した彼が見たものは、海鳴が一望できるとても綺麗な景色だった。

当麻「これって…」

仕上「綺麗だろ？俺の秘密のスポットなんだよ」

当麻「どうして教えてくれたの？」

仕上「何かお前、元気が無いみたいだたからさ。まあ、疲れたときはこの景色でも見て元気だせって」

当麻「あ…ありがとう浜面君…」

仕上「浜面でいいって、俺も上条って呼ぶからさ」

当麻「う…うん」

転校してきたばかりの人間にお気に入りの場所を教えるなど、浜面仕上もとても親切であると実感する上条当麻。
しばらくの間、少年達は屋上から海鳴の景色を眺めていた。
浜面と別れた少年は、晩御飯の材料を買う為に最寄のスーパーに寄った。
そこで、彼は先日お世話になった結標真紀に出会う。

真紀「あら、上条君じゃない」

当麻「昨日はありがとうございました」

真紀「どういたしまして」

どうやら彼女も買い物中だったらしく、買い物袋を持っていた。
彼女と一通り世間話をした後、少年は少女と別れた。
晩御飯の材料を買った少年は、マンションに向けて移動し始めた。
少年が自宅に向かっている頃、高町なのはは自宅にて上条当麻のことを両親に話していた。

なのは「…だったんだよ」

桃子「随分親切な子ね」

土地勘の働かない場所で、猫を探すのは下手をすれば迷子になる危険性を含む。
少年が何も考えなかった可能性もあるのだが…

士郎「そうだ。なのは、今度彼を家に招待すればいいんじゃないか？」

なのは「え？」

士郎「始めて海鳴市に来るのなら、不安もあるだろうし、それにその子に会ってみたいからな」

桃子「彼の歓迎会をすればいいんじゃないかしら？」

なのは「でも、まだ知り合ったばかりだし…そこまで親しいってわけじゃないし…」

いくら高町家の人間がとても親切だと言っても、知り合ったばかりの人間の家にお邪魔することなど、少年が反対する可能性が高い。
そんな少女の様子を見ていた士郎は…

士郎「それならクラスの歓迎会ということにすればいい。それなら、彼も参加しやすいだろうからね」

なのは「そうだね。じゃあ明日聞いてみる」

なのはが両親と話している頃、少年はマンションに到着していた。
帰宅した少年は早速、晩御飯を作り始めた。
料理を作っていた少年だったが、突如玄関の方向から音が聞こえた。

ぐ〜！！

不審に思った少年が、玄関に向かい扉を開ける。

アルフ「う…腹減った…」

当麻「だ…大丈夫…？」

玄関を開けた少年が見たのは、涎を垂らしたアルフだった。
アルフの態度から、お腹が減っていると判断した少年は…

当麻「もし良かったら、ご飯食べる？」

アルフ「え…いいのかい…？」

当麻「まだ作ってる途中だけど…」

アルフ「ありがとう！！」

目を輝かせてお礼を述べるアルフに若干顔が引き攣る当麻。
部屋にアルフを案内した当麻は、料理を再開する。
ちなみに、夕食のメニューは若鶏のから揚げ、味噌汁の二品だった。
両親が亡くなってから、一人で暮らしていた少年にとって料理は密かな趣味となっていた。
料理の匂いを嗅いだアルフのお腹の音は益々激しさを増していた。
そんなアルフの様子を見た当麻は、ある疑問がわいた。

当麻「いつもご飯はどうしてるの？」

アルフ「インスタントだけど？」

当麻「ご飯は作らないの？」

アルフ「あたしもフェイトも作れなくてね」

当麻「それって…『ピンポーン』…ん？」

インターホンが鳴って当麻は玄関に向かう。
玄関に居たのは、フェイト・テスタロッサだった。

フェイト「あ…あの…アルフが来てないかな？」

当麻「来てるけど…」

アルフ「フェイト～おかえり～」

フェイトの言葉に手をヒラヒラ振りながら、
まるで、自分の部屋の様に振舞うアルフに溜息をつくフェイトと苦笑いをする当麻。
フェイト「何やってるの…？」
アルフ「当麻がご飯を作ってくれるって～」
フェイト「え？」
当麻「君も食べる？」
フェイト「で…でも…迷惑じゃ『ぐ～』…あ／／／」
当麻「ちょっと待っててね」
フェイト「…」コク
少年の言葉に若干赤くなりながら、無言で頷く少女。
アルフはそんなフェイトの様子を見ながら、笑っていた。
ようやく、料理が完成して料理をテーブルの上に並べる当麻。
フェイトとアルフも待っているだけではなく、皿を並べるのを手伝ったりした。
当麻「いただきます」
アルフ「いただきま～す」
フェイト「い…いただきます」

料理を食べ始める三人。
普段から、インスタント食品ばかり食べていた二人にとって、少年の料理はとても美味しかったらしく…

アルフ「美味い…美味いよ…！！」

フェイト「美味しい…」

凄まじい速度で箸を進める二人の様子を見ていた少年は、内心とても喜んでいた。
自分の料理を誰かに食べてもらう経験なんて、今までの人生で一度も無かったが、初めて他人に振舞った料理を絶賛されたのは、非常に嬉しかった。
その上、誰かと一緒の食事自体が久々で、食事もいつもより美味しく感じていた。
この瞬間、上条当麻は確かに『幸せ』だったのだ。

アルフ「ご馳走様！！あ～美味かった～」

フェイト「ご馳走様。本当に美味しかった」

当麻「ご馳走様」

夕食を食べ終わった二人に、少年は一つの提案を行う。

当麻「あのさ…これからも二人の料理を作ってもいいかな？」

フェイト「で…でも流石に何度もご馳走になるのは…」

当麻「駄目かな？」

アルフ「ここはトウマのお世話になろうよフェイト」

フェイト「で…でも…」

当麻「僕が作りたいだけだから、フェイトは気にする必要なんてないよ」

フェイト「当麻…本当にいいの？」

当麻「うん」

アルフ「よっしゃ！これから毎日、美味いご飯が食べられる！」

フェイト「あ…アルフ…」

当麻「あはは…」

第4話　孤独な少年と少女（前書き）

五和「上条さんが子供になったですって！！？」

神崎「上条当麻が子供に！？」

御坂妹「あの人が…フフ…」

姫神「今の内に手懐けておけば…」

インデックス「ごはんはどうするの！？」

レッサー「子供の内から調教しておけば、イギリスの引き込むことも容易かもしれません！！」

主「上条当麻を巡る女性達の戦いが始まる。しかし、彼女達は知らない。彼女達自身が絶大な実力を持っているなど…」

上条「何ナレーションしてんだよ…」

主「ふざけすぎた…今回もよろしくお願いします」

第４話　孤独な少年と少女

『マンション』

少年がフェイトとアルフの料理を担当することに決まってから一夜明けた。
早速、朝ごはんを作り始める上条当麻。

ピンポーン！！

当麻「はい」

少年が玄関に向かい、扉を開けるとそこにはフェイトとアルフが居た。

アルフ「おはよ～」

フェイト「おはよう」

当麻「おはよう」

二人をリビングに案内して、再び料理を作り始める少年。
そんな少年の様子を見ていたフェイトは、何か手伝えることはないかと尋ねたが、特に手伝ってもらうこともないので、少女の申し入れを断った。
それから、少し時間が経って料理が完成した。

アルフ「いっただきま～す！！」

フェイト「いただきます」

当麻「いただきます」

朝食を食べ始める三人だったが、当麻がアルフにある質問をした。

当麻「ずっと気になってたけど、その耳は付けてるの？」

フェイト「そ…そうだよ…ねぇアルフ…」

アルフ「いやこれは…」

フェイトの言葉を否定しようとするアルフだったが、フェイトの態度を汲み取ったのか少女に合わせた。

アルフ「そ…そうなんだよ！！中々似合うだろ！？」

当麻「う…うん…」

そんな二人の態度を見た少年は、未だに疑問を抱いたままだったが、とりあえずこの問題に対しては保留にしておくことにした。

当麻「ところで二人とも、学校はどこに言ってるの？」

フェイト&アルフ「それは…」

少年に自分達の事情を話すわけにはいけないと考えている二人は、その疑問に正直に答えるわけにはいかなかった。

フェイト「色々事情があって…今は学校に行ってないんだ…」

アルフ「同じく…」

当麻「そうだったんだ…何だかごめんね…」

フェイト「気にする必要なんてないよ！」

アルフ「そ…そうだよ！」

慌てて取り繕う二人の様子を見て、少年は少し笑い…

当麻「それなら弁当を作ったほうが良さそうだね」

フェイト「流石にそこまでしてもらうわけには…」

当麻「前にも言ったけど、僕が勝手にやってることだから気にしないで」

当麻の態度を見たフェイトは、少年はこちらが断っても譲らないだろうと判断して、少年の申し出を受けることにした。
早速、二人分の弁当を作り始める少年。
そんな少年の後ろ姿を眺めていた二人は…

フェイト「どうしてここまでしてくれるんだろう…？」

アルフ「きっとトウマもフェイトと同じように優しいんだよ」

それから少年が弁当を作り終えて二人に渡して、少年も学校に向かった。

『私立聖祥大附属小学校』

昼休憩になり、給食を食べていた少年の下に高町なのはがやって来た。

当麻「高町さん？どうしたの？」

なのは「上条君。ちょっといいかな？」

彼女の隣にはアリサとすずかも居た。

当麻「う…うん」

なのは「あのね…」

少女はクラスで少年の歓迎会をしたいということを少年に伝える。

当麻「で…でも…皆に迷惑かけるし…」

なのは「そんなことないよ」

アリサ「そうよ」

すずか「駄目かな？」

当麻「ぼ…僕でよかったら…」

アリサ「よし！これで決まりね！」

少年の了承を経て歓迎会を行うことが決定する。

『公園』

上条当麻が昼休憩を迎えている頃、フェイトとアルフの二人は海鳴市の公園で弁当を食べていた。

アルフ「見つからないね。ジュエルシード」モグモグ

フェイト「うん…」モグモグ

アルフ「確かにこの世界で間違いないはずなんだけど…」

フェイト「こればっかりは地道に探すしかないよ」

アルフ「それもそっかぁ」

フェイト「（もし、この世界に無かったら、当麻とお別れすることになる…）」

二人の少女がこの世界で出会った一人の少年。
たった二日程度しか経っていないが、彼女達は少年ととても仲良くなっていた。
自分で料理が作れない彼女達にとって、少年が作る料理は新鮮だったし、一緒に食事をしている間は、確かに楽しいと感じていた。
海鳴市にずっと留まる訳にはいかない少女達にとって、少年といる時間は大切にしたかったのだ。

『図書館』

小学校の授業が終了して、少年は真っ先にマンションに帰ろうとは

せず、図書館に向かった。
海鳴市に来る以前も、図書館にいることが多かった少年。
他人から傷つけられるばかりの少年にとって、図書館は唯一静かに過ごせる場所だったのだ。
海鳴市の図書館に入って、何か適当な本はないかと探していた当麻だったが、そこで彼は一人の少女を見かける。

???「やっぱり取れんな～どうしよう…」

何やら車椅子の少女が本を取ろうとしているのだが、少女が取ろうとしている本の位置が、高いところにあり、彼女は困り果てているようだった。
そんな少女の下に、少年は近寄ると…

当麻「あの…手伝おうか？」

???「え？」

突然の申し出に動揺する少女だったが、少し時間を置いた後…

???「頼んでもええの？」

当麻「うん」

???「あの本なんやけど…」

当麻「分かった」

少女が指差した場所にある本は、少年の背が届かない場所にあったらしく、少年は脚立を使用して本を取ったのだが…

ガシャーン！！

脚立から盛大に落ちた少年は、勢い良く地面に激突する。

？？？「だ、大丈夫か！？」

当麻「いたた…大丈夫だよ…慣れてるから…」

幼い頃から生傷の絶えなかった少年にとって、この程度のことは大して気にするほどのことでもなかった。

？？？「慣れてるって…」

当麻「それより…はい…」

そう言って少年は少女に本を渡す。

？？？「おおきに」

当麻「どういたしまして」

？？？「初めて見る顔やけど、図書館に来るのは初めてなん？」

当麻「少し前にこの町に引っ越してきたんだ」

？？？「そうだったんか。そういやまだ自己紹介しとらんかったね。八神はやてや」

当麻「上条当麻だよ。八神さんは良く図書館にいるの？」

はやて「せやな。基本的に四六時中に図書館におるで」

当麻「学校はどうしたの？」

はやて「事情があって行けないんや…」

当麻「ごめんね…」

はやて「ええて。上条君が気にすることやあらへん」

沈む少年を元気付ける少女。

はやて「そう言えば、上条君は始めてこの図書館に来たって言っとったけど、案内してあげようか？」

当麻「いいの？」

はやて「困ったときはお互い様や」

当麻「ありがとう」

少女に図書館を案内してもらう少年。
二人は話しながら、ある共通点があることが発覚する。
上条当麻と八神はやては事故で両親を亡くしており、ずっと一人暮らしだったということ。
同じような境遇の人間に出会うと思っていなかった二人は、非常に驚いていたが、再び話し始めていた。

はやて「上条君の趣味は料理なんやな」

当麻「八神さんも料理が趣味なんだね」

はやて「今度、家の料理を食べてみるか？」

当麻「こっちも何か作ってこようか？」

はやて「せやね」

当麻「そろそろ帰らなきゃ…」

はやて「そっか…」

当麻「じゃあ八神さん。また明日」

はやて「…上条君。また明日な」ニコ

上条当麻は八神はやてと分かれて帰路に着く。

その頃、海鳴市に一人に男が訪れていた。

???「ここが海鳴か…この霊装の威力を試すのに最適な場所だな…」

男は引き裂いた様な笑みを浮かべて歩を進めていた。

平和な町に迫り来る危機に気付く者は誰もいない。

第5話　謎の『右手』

数日後、上条当麻は浜面仕上とアリサ・バニングス、月森すずかと高町なのはの五人で昼休憩を過ごしていた。

最初は、緊張していた少年も浜面やなのは達の協力もあり、徐々にクラスに打ち解けてきた。

仕上「学園都市に行ってみて～な～」

アリサ「どうしたのよ浜面？」

仕上「だって科学技術が物凄く発達してんだぜ？何か夢があるじゃん」

なのは「そういうものなの？」

当麻「分からないけど…」

すずか「子萌先生も学園都市から来ているのよね？」

なのは「うん」

当麻「どうして子萌先生は海鳴に来たんだろう？」

仕上「それは本人に聞いてみねーと分かんねーだろ」

アリサ「でも浜面。学園都市って旅行で行ける様な場所じゃないの

よ？」

仕上「マジで？」

すずか「年に一度、大覇星祭っていう行事で外部の人に一般開放されるらしいけど…」

なのは「基本的に、学園都市に学生として入学したら、学園都市の外に行くだけでも大変な手続きが必要になるんだって」

仕上「うへぇ…あんまいいもんじゃねぇな…」

当麻「浜面は学園都市に行きたかったの？」

仕上「だってロボットがいるんだぜ！？男のロマンだろ！？」

なのは「そうなの？」

当麻「僕にはよく分かんないけど…」

仕上「分かってねぇな上条。それに超能力なんて物もあるんだぜ？」

なのは「脳を開発して超常現象を引き起こす力だっけ？」

すずか「でも、脳を開発するなんてちょっと怖い」

アリサ「大体、超能力なんて何に使うのよ？」

仕上「う…それは…」

アリサ「全く…浜面は浜面なんだから」
他愛ない話をする少年少女達。
そこで、浜面が何かを思い出したように語る。
仕上「そういや、ここ最近海鳴で何か事件が起きてるらしいけど、
あれは化け物の仕業っていう噂があるらしいぜ」
当麻「化け物の仕業？」
なのは「そんなのがいるの？」
アリサ「いるわけないでしょ…」
すずか「ア…アリサ…」
仕上「何でも石の巨人みたいなのが、暴れまわってるらしいんだ」
アリサ「石の巨人ねぇ…」
当麻「どれぐらい大きいの？」
仕上「そこまでは分からないけど、多分巨人っていうくらいだから、
相当でかいんだろうぜ」
雑談している少年少女達だったが、そこで思わぬ横槍が入る。
子萌「みなさ～ん。本日の授業はこれで終わりになりました～」
予想だにしなかった月詠子萌の言葉に動揺する一同だったが、

仕上「せんせ～それって、海鳴の事件が原因ですか？」

子萌「秘密です。皆さんは寄り道せずに帰ってくださいね～」

そう言って教室から出て行く子萌。
その後ろ姿を見ていた少年少女達は…

「「「「「怪しい…」」」」」

全員、子萌の態度を不審に感じていた。
しかし、子萌の言葉を素直に聞いていた一同はそれぞれ帰宅することに決めた。

上条当麻が小学校から出た頃、フェイト・テスタロッサとアルフは海鳴市のスーパーを訪れていた。
何故彼女達がスーパーに来ているのかというと、フェイトが上条に料理を作らせっ放しでは忍びないので、買い物だけでも任せて欲しいと言ったからである。

フェイト「えっと…この商品は…」

アルフ「フェイト～これ買ってもいい～？」

フェイト「いいよ。それで…これは…何処にあるの？」

順調に買い物を済ませていくフェイトだったが、少年に頼まれた商品が見つけられなかった。
途方に暮れている少女達に近づく一人の女子中学生が居た。

真紀「どうしたの？」

フェイト「あ…えっと…商品を探しているんですけど…見当たらなくて…」

真紀「もし良かったら手伝いましょうか？」

アルフ「いいのかい？」

真紀「困ったときはお互い様だからね」

フェイト「あ…ありがとうございます」

真紀「それじゃちゃっちゃと見つけちゃいましょうか」

結標真紀に協力してもらい、再び商品を探し始めるフェイトとアルフ。

探していた商品が見つかり安堵する二人。

アルフ「ありがとね」

フェイト「ありがとうございました」

真紀「どういたしまして。それじゃ～ね～」

手をヒラヒラ振りながら二人の前から去っていく少女。

フェイト「親切な人だったねアルフ」

アルフ「そうだね」

買い物を終えた少女達は、マンションに向けて移動を開始した。
その頃、上条ははやてに出会っていた。
どうやら彼女は今日も図書館に出かけていたのだが、図書館がいつもより早く閉じてしまい、困っているところだったらしい。

はやて「それにしても、物騒な世の中やな」

当麻「そうだね。早く事件が解決するといいんだけど…」

はやて「せやな…って何やあの人…けったいな格好しおってからに…」

当麻「ちょ…八神さん…失礼だよ…」

二人は一人の男を見かける。
その男は黒い服装をしているのだが、明らかに過剰にアクセサリーの様な物を身に纏っていた。
海鳴では決して見る事の無い姿の人間に、若干警戒心を抱きながら男の前を通り過ぎようとする二人だったが…

???「この力…素晴らしい…」

男はそう呟くと、懐からチョークの様な物を取り出して、地面に何かを描き始めた。

ズゴォ!!

瞬間、地面が隆起して巨大な石の巨人が二人の前に現われた。

ゴーレム「グオォォォォォ！！」

当麻「な…あれって…」

はやて「な…なんなん…あれ…」

浜面仕上から聞いた単なる噂だった筈の存在が、上条当麻と八神はやての前に居た。

？？？「殺せ」

男の言葉を聞いた瞬間、少年は少女の車椅子の取っ手を掴みその場から全力で逃げ出していた。

未だに目の前の現実を受け入れる事が出来ない二人だったが、あのゴーレムが危険ということは本能で理解したのだろう。

必死で怪物から逃げる二人だったが、焦りながらも会話を交わす。

はやて「上条君！なんなんあれ！？」

当麻「分かんないけど、とにかく逃げなきゃ！！」

全力で逃げる二人を追いかけるゴーレムだったが、二人が子供ということもあり、姿を見失ってしまう。

？？？「ちっ…」

男は二人を逃がしてしまったことに苛立つが、例え警察を呼んだところで何かが出来るわけでもない。

ゴーレムを撒いた二人は…

当麻「何とか逃げ切れたのかな…？」

はやて「上条君…私…怖い…」

無理もないだろう。

ゲームやアニメの様な非現実な出来事が目の前で起きたのだから…

当麻「一旦僕の家に非難しよう！」

はやて「え？」

少年は少女をマンションに連れて行くことを決意する。

動揺するはやてだったが、少年もそこまで気が回っておらず、少女の言葉を無視してマンションに辿り着く。

そこで彼はフェイトとアルフに遭遇する。

フェイト「当麻？どうしたの？」

冷や汗の出ている少年を不審に思ったフェイトは当麻に問いかける。

アルフ「そっちの子は？」

当麻「悪いけどこの子をお願い！！」

アルフの質問を無視して、少年は再びゴーレムの所に向かおうとする。

はやて「駄目や上条君！！危険すぎる！！」

当麻「大丈夫だよ」

一言呟き、少年は先程ゴーレムと遭遇した場所まで走って行った。

はやて「上条君…どうして…」

フェイト「一体何があったの？」

二人に何があったのか尋ねるフェイト。
はやては先程の出来事をフェイトに語る。
少女の言葉を聞き終えたフェイトは…

フェイト「アルフ！！この子をお願い！！」

アルフ「分かった！！」

はやて「危険や！！」

フェイト「大丈夫…当麻は任せて！！」

フェイトも上条が向かって行った方向へ駆け出す。
はやてはそんな少女を呆然と眺めていることしか出来なかった。
先程、ゴーレムと遭遇した場所まで戻ってきた少年。
辺りを見回す少年だったが、謎の男もゴーレムも見当たらない。
何処か別の場所に行ったのかと考える少年だったが…

きゃあぁぁぁぁ！！

悲鳴が聞こえて、その場所に向かって全力で駆け出す。
少年が悲鳴がした場所に辿り着くと、黒髪のショートの少女がゴーレムに襲われていた。

すかさず少年は少女とゴーレムの間に割り込む。

当麻「大丈夫？」

？？？「う…うん…」

当麻「良かった…君は早く逃げるんだ！」

？？？「で…でも…」

当麻「僕なら大丈夫…だから早く！」

少年の言葉を聞いた少女は、無言で頷きその場から逃げ切る。
少年は男とゴーレムを睨みつける。
男は少年の姿を見て鼻で笑い、ゴーレムに少年を殺すように命令する。
その拳は、人間の原型を留めることが不可能と言ってもおかしくないほどの威力を持っている。
少年は、目の前の存在が恐ろしくて震えが止まらない。
今すぐにでも逃げ出したい衝動に駆られる。
しかし、少年は逃げない。
今、ここで自分が逃げたら目の前の化け物は他の人間を襲うことを知っているから。
ゴーレムの拳が少年に迫る。
少年は両手を交差していた。

フェイト・テスタロッサは上条当麻を追っていたが、途中で見失ってしまう。
遅くなればなるほど、少年は危険に晒される可能性が高いと知っている少女は焦っていたが、突如そこまで遠くない場所から少女の悲

鳴が聞こえる。
少女は悲鳴が聞こえた方向に走り、その現場に辿り着くが、少年が今まさにゴーレムの一撃を受けようとしているところだった。
少年を追っている為に「　」していない少女だったが、今から「　」したところで少年を助けられるわわけではない。

フェイト「当麻ぁぁぁ！！」

少女の叫びも虚しく、ゴーレムの拳は上条当麻に直撃した。
しかし、少年が死んでしまうという少女の幻想は殺された。

バキン！！

ゴーレムの拳が、上条当麻の『右手』に触れた瞬間、世界が割れる様な音が周囲に響き渡った。
ゴーレムの動きが停止することに驚愕する男とフェイトと当麻だったが、更に驚くべき出来事が発生した。

ボゴォォ！！

突如、少年に触れたゴーレムの身体が崩れ始めたのだ。

？？？「なっ…！？」

フェイト「何が…！？」

当麻「え…？」

あまりにも異常な事態に思考が停止する三人だったが、ゴーレムの身体が再び信じられない速度で再生する。

ゴーレムの胸元には小さな宝石の様な物が光を放っていた。
フェイト・テスタロッサはその宝石に見覚えがあった。

フェイト「あれって…ジュエルシード！？」

？？？「くくく…とんだイレギュラーがあったが、俺にがあの宝石がある」

男は実力のある「　　」ではなかったが、ジュエルシードを使用することにより、あれほどのゴーレムを作り出せる程の力を得たのだ。
男は引き裂いた様な笑みを浮かべて、ゴーレムに再び少年を攻撃するように命令した。
しかし、この場にいるイレギュラーは上条当麻だけではなかった。

フェイト「バルディッシュ！！」

『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ』

突如、金色の魔力弾がゴーレムに直撃する。
何が起きているのか理解できていなかった男と少年は、攻撃が放たれた場所を見る。
そこには、フェイト・テスタロッサが居た。
しかし、普段の彼女とは全く異なる服装をしており、何に似ているかと表現するならば、魔法少女という言葉が最適だった。
呆然とする二人だったが、少女は続けて手に持っている鎌の様な物をゴーレムに向けて…

『Ｓｅａｌｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ．Ｓｅｔ　ｕｐ』

フェイトの鎌から光の様な物がゴーレムに直撃する。

そして、ゴーレムの身体が徐々に崩壊する。
そして…

フェイト「ジュエルシード、封印！！」

『Ｓｅａｌｌｉｎｇ』

ゴーレムの身体が完全に崩壊して、その身体から小さな宝石が出現して、その宝石はフェイトの持つ鎌の様な物に吸収されていた。
もとの姿に戻ったフェイトを呆然とした表情で見ている上条当麻。

フェイト「当麻…今まで隠しててごめんね…」

悲しそうな表情で呟くフェイト・テスタロッサ。

一方その頃、ゴーレムを倒された男は逃走していた。
そんな彼の前に、中学生くらいの少女が現われる。
男は少女を無視してその場を通り過ぎようとしていたが…

ヒュン！！

ドス！！

？？？「うっ…」

少女の一撃を受けた男はその場に倒れる。

真紀「全く…傍迷惑な『魔術師』ねぇ」

結標真紀は一人で呟く。

真紀「それにしても…あの子が『魔道士』ね…まぁ悪い子じゃなさそうだから、別に放っておいてもいいかな」

少女は倒れた男を放置してその場から悠々と立ち去って行った。

第6話　フェイトの決意と当麻の歓迎会（前書き）

滝壺「はまづらが子供になった？」

絹旗「私がお姉ちゃんに超なるわけですね！？」

麦野「今なら簡単に殺せるか…」

主「麦野さんだけ物騒すぎますよ！」

麦野「あ！？」

主「ナンデモアリマセン」

フレメア「今の私ならはまづらと幼馴染にゃあ」

第6話　フェイトの決意と当麻の歓迎会

ゴーレムを倒した二人は八神はやてとアルフに合流して、はやてを自宅に送った後、上条当麻とフェイト・テスタロッサとアルフの三人は少年の自室に集合していた。

当麻「…」

フェイト「…」

アルフ「…」

先程から一言も話さない一同。
沈黙がその場を支配する。
しかし、そのままでは埒が明かないのでアルフが口を開く。

アルフ「当麻には知られたくなかったんだけどね…」

当麻「二人は…一体…」

フェイト「私達はね…別の世界から来たんだよ」

当麻「別の…世界…？」

少年は少女が何を言っているのか全く分からなかった。
別の世界なんて存在するか定かでもない世界から来たというのだから。
それから、少女達は自らの正体を語り始めた。

フェイトが昼間見せた姿は、デバイスと呼ばれる道具を用いて変身した姿であるということ。
その姿になると魔法と呼ばれる力を行使できるということ。
ゴーレムの身体に埋め込まれていた宝石は、ジュエルシードと呼ばれるもので莫大な力を秘めているということ。
少女達がこの世界に来たのは、ジュエルシードと呼ばれる宝石を手に入れるためであること。
アルフは人間ではなく、フェイトが魔力で作り出した使い魔という存在であること。
唯の一般人である少年にとって信じられないような話のオンパレードだったが、目の前で魔法を使った場面を見たことから少年は少女の言葉を疑う余地は無かった。

フェイト「ごめんなさい…私のせいで当麻を巻き込んじゃって…」

突然、少年に謝罪の言葉を述べる少女に少年は困惑する。
少女が謝る必要など全く無いのだが、一人で全てを背負い込みがちな少女は少年に謝らずにはいられなかった。

当麻「フェイトは何も悪くなんてないよ。それにフェイトが助けてくれたおかげで僕はここにいられるんだから」

フェイト「…」

当麻「それより…どうしてフェイトはジュエルシードを集めているの？」

少年は少女が世界を超えてまで、ジュエルシードを集めることがどうしても理解できなかった。
お使い感覚で世界を超えれるようなことなんてあるはずもない。

だからこそ、少年は少女がそこまでする理由が知りたかったのだ。

フェイト「それは…」

アルフ「フェイト…」

当麻「どうしても知りたいんだ…駄目かな？」

フェイト「私は…お母さんの為に…」

当麻「お母さんの？」

アルフ「フェイトの母親がジュエルシードを必要としていてさ…フェイトはその為にジュエルシードを集めているんだよ」

当麻「そうだったんだ…」

まだ幼い子供で世界を渡らせてまでジュエルシードを集めさせるなんて普通はありえない。

心なしかフェイトの母親のことを語るときのアルフの表情が少しばかり暗かった。

当麻「フェイトはこれからもジュエルシードを探し続けるの？」

フェイト「うん」

強い決意を秘めた目で少年の言葉に答える少女。

しかし、どこかその瞳は哀しげだった。

上条当麻という少年はそんな少女の話を聞いて一つの決意をする。

当麻「僕にもジュエルシードの捜索を手伝わせてくれないかな？」

フェイト&アルフ「え？」

予期しない少年の言葉に少女達は動揺する。
家事や宿題を手伝うといった生易しい問題ではないのだ。
先程のゴーレムの戦闘を体験している少年が、ジュエルシードを集めることの危険性を理解していないわけではないのだ。
それなのに、目の前の少年は二人を手伝うと申し出てきたのだ。

フェイト「だ…駄目だよ！当麻は魔法を使えない一般人なんだよ！？」

アルフ「そ…そうだよ！」

二人は少年の申し出を断るが…

当麻「お願い」

頭を下げて二人に頼み込む上条当麻。
短い間ながらフェイトとアルフは、この少年は一度決めたことを絶対に曲げないほど頑固であることを熟知していた。

フェイト「分かった…でも絶対に無茶しちゃ駄目だよ？」

当麻「うん！」

嬉しそうに喜ぶ少年の姿を見て、苦笑いするフェイトとアルフ。
正直言って、ただの一般人である少年にジュエルシードを見つけられるとは思わなかった。

しかし、危険を承知で自分に味方してくれる少年の気持ち無下にすることなど少女達に出来なかった。

一方その頃、自宅で図書館から借りた本を読んでいた八神はやては…

はやて「あの時の上条君かっこよかったな…」

思い出すのは昼の出来事。
初めて会った時はどこか頼りない印象を抱いていたが、ゴーレムと対峙した際に見せた強い決意を秘めた表情。
身を挺してまで自分を守ってくれた少年の事を思い出すたびに、少女は顔が赤くなるのを感じていた。

翌日、上条当麻は浜面仕上と共に翠屋の前に居た。
本日は、上条当麻の歓迎会が行われる日だったのである。

当麻「ここでいいのかな？」

仕上「とっとと入ろうぜ！」

カラーン！

勢い良く扉を開ける浜面仕上。
店内は少年のクラスメート達で埋め尽くされていた。
呆然としている当麻だったが、少年の下に一人の女性が近づいてきた。

桃子「あなたが上条君ね？」

当麻「は…はい…上条当麻です…」

桃子「そんなに緊張しなくてもいいのよ？私は高町桃子。なのはの母です」

当麻「高町さんの…」

仕上「とっとと座ろうぜ上条～」

いつの間にか席についていた浜面仕上が上条に手を振る。
桃子に促されて席に着く少年。
そんな少年の下にケーキを持ったなのはが近づいて来た。

なのは「上条君。いらっしゃい」

なのはにケーキを渡される当麻。

当麻「あ、ありがとう高町さん」

なのは「どういたしまして」

ケーキを渡されてなのはにお礼の言葉を述べる。
そして本日の進行役であるアリサが…

アリサ「全員に行き渡ったわね？それじゃあ上条の歓迎会を今から行うわよ～！」

アリサの言葉に同意するクラスメート達。
そして、一斉にケーキを食べ始める一同。

仕上「やっぱりここのケーキは超うめぇ！！」

ケーキにがっつく浜面を見たアリサは…

アリサ「あんた…もうちょっと丁寧に食べなさいよ…」

すずか「あはは…」

呆れるアリサと苦笑いするすずか。
ケーキを食べている最中の当麻に一人の男性が近寄ってくる。

士郎「うちのケーキは美味しいかな？」

当麻「とても美味しいです」

士郎「喜んでくれているようで何よりだよ。私は高町士郎。なのはの父親だよ」

当麻「今日は本当にありがとうございます」

士郎「かしこまらなくていいんだよ。そう言えば君はどのあたりに引越したんだい？」

上条当麻が海鳴市の何処に住んでいるのか聞いていなかったクラスメートは、その話に耳を傾ける。

当麻「僕は…」

海鳴市のとあるマンションに住んでいると告げる上条。

士郎「なるほど。そう言えば君のご両親も海鳴に来たばかりだろう

？ご両親のケーキも用意しようか？」

当麻「両親は…」

少しばかり暗い表情になった少年は両親がいないことを淡々と語り始める。

少年の話を聞いた一同は驚愕していた。

クラスメートも上条の両親が居ないことは知らなかったらしく、呆然としていた。

高町士郎と高町桃子も沈痛な表情をして…

士郎「すまなかったね…辛かったろう…？」

当麻「いえ…それに…」

桃子「それに？」

当麻「皆のおかげでそれほど辛くないんですよ」

海鳴市に訪れるまでは少年の味方は両親だけで、常に周囲の人間の悪意に晒されてきたのである。

しかし、海鳴市では少年を傷つけるような人間はおらず、むしろ心優しい人ばかりで少年は確かな『幸せ』を感じていたのだ。

士郎「そうか…」

静まりかえった店内だったが、突如浜面が…

仕上「おい上条！早くケーキ食わないと俺が食っちまうぞ！」

当麻「は、浜面！？ちょっと待って！？」

浜面の突然の行動に焦る上条。
周囲の人間はそんな彼等のやりとりを聞いて、笑い出した。
再び明るい雰囲気を取り戻す店内。
ケーキを食べ終えた上条は…

当麻「あの…このケーキを三つ頂いてもいいですか？」

桃子「ええ…どうぞ」

当麻「ありがとうございます」

上条当麻の歓迎会が無事終了して、クラスメートはそれぞれ解散した。
後片付けを手伝う高町なのはは、初めて少年に出会ったときの違和感の正体を理解した。
少年が時折見せた寂しそうな表情。
それはかつて、高町なのはが一人だったときと酷似していたのだ。
しかし、少女は少年の様に大切な人を失ったわけではない。
少年と少女には決定的な違いがあった。
当麻は自宅に向かう前に八神はやての自宅に向かった。

ピンポーン！

はやて「は～い」

扉を開くはやては当麻の姿を確認する。

はやて「上条君？どないしたの？」

当麻「ケーキ貰ったんだけど、良かったらどうかな？」

はやて「ええの？」

当麻「うん」

はやて「おおきに！」

喜ぶはやてを見て微笑む少年。

当麻「それじゃあ僕はこれで」

はやて「ありがとな…あ！」

当麻「どうしたの？」

はやて「上条君。明日図書館に来れるか？」

当麻「行けるけど…」

はやて「弁当作ってもええか？」

当麻「いいの？」

はやて「ケーキをくれたお礼や」

当麻「ありがとう」

約束をして自宅に向けて移動する少年。

帰宅した少年は、フェイトとアルフを誘って本日翠屋で貰ったケーキを食べた。

アルフ「滅茶苦茶美味いよこれ！！」

フェイト「うん」

ケーキを頬張る二人を見て、少年はこの幸せがいつまでも続けばいいと願っていた。

第7話　始まりの物語

翌日、はやてから弁当を渡された上条はマンションにて、フェイトとアルフと一緒に渡された弁当を食べていた。
どうやら彼女の弁当の味は少年よりも上だったらしく、二人は絶賛していた。
フェイトとアルフは弁当を作ってくれた八神はやてに、近いうちにお礼をすることに決めた。
弁当を食べ終えた三人は、ジュエルシードの捜索を始めた。
当麻は初めてのジュエルシードの捜索ということもあり若干緊張していた。

フェイト「そんなに緊張する必要はないよ」

アルフ「そ～だよ。別に当麻が戦う必要なんてないんだし～」

当麻「う…うん」

ジュエルシードを探しながら少年は、フェイトからジュエルシードの特徴について教えられていた。
ジュエルシードは全部で２１個存在しており、それぞれが強大な魔力を秘めており、周囲の生物が抱いた願望を叶える力を持っているらしい。
フェイトの母親が何故そのような物を探させているのか全く検討のつかない少年だったが、今はその問題については後回しにしておこうと考えた上条当麻だった。
結局、本日はジュエルシードを発見することが出来なかった一同。
マンションに帰った三人は早速夕食の準備に取り掛かる。

夕食を食べ終わった三人はそれぞれの部屋に戻って行った。
ベッドに入った少年は、ジュエルシードの事について考えていた。
周囲の人々の被害を未然に防ぐためにも、一刻も早くジュエルシードを回収しなければいけないことは分かっている。
しかし、ジュエルシードを回収し終えたらフェイトとアルフは海鳴市を去ってしまう。
自分の考えが我侭である事を承知しながらも、少年は二人に去って欲しくなかったのだ。
こうして夜が更けていき、海鳴市に来てから初めての休日は終わりを告げた。

授業が終わって下校中の一同。

アリサ「魔法少女？」

仕上「そうなんだよ。何でも謎の化け物もそいつが倒したらしいぜ」

すずか「流石に魔法少女なんていないんじゃないかな？」

なのは「私もそう思うけど…」

当麻「ま…魔法少女もゴーレムも噂なんじゃないかな…？」

フェイトとゴーレムの戦いの様子を誰かに見られていたのだろうか。
噂の中心部に居た少年としては、非常に気まずかった。

仕上「確かにそうだけどよ～。でも本当だったら何か面白そうじゃん」

アリサ「謎の化け物はともかく、魔法少女は夢があるかもね」

すずか「確かにそうだね」

なのは「にゃはは…」

再び歩き始める一同だったが…

???「（聞こえますか!?僕の声が聞こえますか!?）」

なのは「!?」

当麻「高町さん?どうしたの?」

なのは「聞こえないの?」

アリサ「何が?」

どうやら今の『声』はなのは以外には聞こえていないようだった。
少女は『声』がした方向へ駆け出していた。
他のメンバーは何が起きているのか全く分からなかったが、とりあえずなのはを追いかけることに決めた。
そして、なのはを追った少年少女達が見つけたのは、傷だらけになって倒れているフェレットだった。

なのは「大丈夫!?」

アリサ「ど、どういうこと!?」

すずか「早く手当てをしてあげなくちゃ…!」

当麻「この近くに動物病院は…」

仕上「俺は知ってる！早く連れて行くぞ！」

なのは「う、うん！」

なのはがフェレットを抱きかかえて、一同は最寄の動物病院まで向かった。

フェレットを医師に預けた後、少年少女達はフェレットを誰が預かるかについて話していた。

仕上「俺んちは多分無理だ」

アリサ「私も親が…」

すずか「…」

なのは「私がお父さんに聞いてみようか？」

当麻「僕が飼うよ。一人暮らしだから何の問題もないから」

なのは「分かったよ。それにしても…」

アリサ「何であのフェレットは傷だらけだったんだろ…？」

すずか「もしかして…誰かに虐待されたのかな…？」

仕上「もしそうなら…俺がそいつをボコボコにしてやる…」

当麻「落ち着いて浜面…」

明らかな怒りを見せる浜面だったが、当麻が落ち着かせる。
とにかく、一旦帰ることを決めた少年少女達。
上条はフェイトとアルフの二人に合流して、本日のジュエルシードの捜索を始めた。
いつもより暗い雰囲気を醸し出している少年を、不審に思ったフェイトとアルフは少年に何があったのかを聞いていた。

フェイト「そんなことが…」

アルフ「…」

当麻「うん…」

フェイト「当麻はその子を飼う事にしたんだよね？」

当麻「うん」

フェイト「じゃあ今度ペットフードとか皆で買いに行こうか？」

当麻「…そうだね」

ジュエルシードの捜索を再開する三人。
それから数時間が経って、本日も見つからないのかと考えていた三人。
そろそろ帰宅する時間に近づいてきたが、そこで少年が一つの提案をする。

当麻「ちょっとあっちを見てくるよ」

フェイト「分かった」

アルフ「早く戻ってきなよ」

フェイトとアルフも別の方向へ移動する。

二人と別れた少年はジュエルシードを探し続けていたが、そこで彼は思わぬ人物を見つける。

当麻「高町さん？」

なのは「か…上条君！？」

当麻「どうしたのこんな時間に？」

なのは「ちょ…ちょっとね…」

何が起きているのか理解できない少年だったが、少女の焦った表情を見た上条当麻は…

当麻「なんだか分からないけど、僕もついて行くよ」

なのは「え…でも…」

当麻「それに、もうこんな時間だし一人じゃ危ないよ」

なのは「…ごめんね…」

当麻「気にしないで」

そして少年は少女にどこに向かうつもりなのかと質問する。

少女は動物病院に向かうつもりだったらしく、移動中に少年と遭遇したということらしい。
少年は何故動物病院に向かうのかその理由が分からなかったが、少女にその理由について聞くようなことはしなかった。
動物病院に到着する高町なのはと上条当麻。

当麻「やっぱり誰もいないのかな？」

なのは「…」

何かを探すような動作をするなのはに疑問を覚える当麻だったが…

「「え？」」

突如、二人の前を二つの生物が通り抜けた。
一匹は昼間のフェレットらしく身体に包帯が巻かれていた。
一匹は身体から触手の様な物が生えている明らかに普通ではない生物だった。

なのは「な…何…あれ…？」

当麻「…」

呆然とするなのはと当麻だったが、フェレットは怪物に追いかけられたままだった。
木に登るフェレットに対して木に体当たりをする怪物。

メキメキ！！

怪物の体当たりを受けた木がいとも簡単にへし折れる。

空中に投げ出されたフェレットだったが、少女がフェレットをキャッチする。
フェレットをキャッチした直後の少女に、怪物は近づく。
なのは「きゃああ！！」
当麻「高町さん！！」
すかさず襲い掛かってくる怪物に、怯える少女の前に少年が出る。
恐怖に震えながらも、少年は右手を突き出す。
バキン！！
少年の右手に怪物の身体が触れた途端、ガラスが割れる様な音が周囲に響き渡る。
怪物の身体の一部が欠けていた。
しかし、その欠けた部分は徐々に元通りになっていった。
呆然としているなのはの手を握り、当麻はその場から全力で逃げ出していた。
怪物から逃げている最中に、すこしばかり落ち着いたなのは。
なのは「な…何なのあれ？」
当麻「分からないけど…今はとにかく逃げなきゃ…！」
少年は怪物の正体について心当たりがあったが、今は逃げることに専念していた。
フェイトの下に向かう途中で、フェレットが目を覚ました。
そして更に驚くべき出来事が発生したのだ。
何と高町なのはが抱きかかえていたフェレットが喋ったのだ。

あまりにも異常な事態に固まる二人だったが、フェレットはなのはに話しかける。
フェレットの話の中で魔法というキーワードに少年は反応する。
間違いない。
目の前のフェレットは、フェイトやアルフと同じ魔法に関係している。
フェレットがなのはに話しかけている最中で、先程の怪物が追いついた。
再び当麻のなのはの前に出る。
そして、怪物に右手を向ける。
しかし、怪物は身体から触手を伸ばして少年に直撃させる。

当麻「がっ！？」

なのは「上条君！！」

触手に突き飛ばされた少年は、コンクリートの壁に勢い良く激突する。
そして、少年の意識は深い闇に飲み込まれていった。

第8話　少女の決意

なのは「上条君！！」

コンクリートに叩き付けられて気絶した少年の下へ向かう少女。

なのは「上条君！しっかりして！」

少年を揺さぶっても起きる気配は全く無い。

そうしているうちに、徐々に迫り来る怪物。

???「くっ…！」

痛みを我慢して、怪物となのはの間に割り込むフェレット。

なのはは自分達を庇うフェレットの姿を見て、一つの決意をする。

なのは「どうすれば魔法って力が使えるの？」

???「え…？」

なのは「上条君やフェレットさんにはこれ以上傷付いて欲しくないから。だから…！」

???「…これを！」

なのはの言葉を聞いたフェレットは、少女に赤い石を渡す。

なのは「これって…暖かい…」

???「それを手に持って、目を閉じて、心を澄ませて、今から僕が言う言葉を繰り返して」

なのは「う…うん！」

「我、使命を受けし者なり」

「『我、使命を受けし者なり』」「契約の元、その力を解き放て」

「えっと……『契約の元、その力を解き放て』」

「風は空に、星は天に」

「『風は空に、星は天に』」

「そして、不屈の心は」

「『そして、不屈の心は』」

「「『この胸に』！！」」

瞬間。

高町なのはが持っている赤い玉から、桃色の光が迸る。

当麻「う…」

タイミング良く少年が目を覚ます。

「「『この手に魔法を、レイジングハート、セットアップ』！！」」

先程よりも、一層強い光が周囲を照らす。
怪物は少女から距離を取っていた。

当麻「眩し…」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｌｅａｄｙ，Ｓｅｔ　ｕｐ！』

光が収まっていき少年は目を開ける。
光の中心部には、白を基本とした服に身を包み、大きな杖を持った、高町なのはの姿があった。

当麻「フェイトと同じ…」

厳密には色々異なるのだが、目の前の少女はフェイト・テスタロッサと同じ魔法を扱う力を得たということを少年は理解した。
事情を知っている少年とは異なり、何も知らされていない高町なのは本人は…

なのは「ふぇ？　……ふぇえええええええええええ！？　こ…これって魔法少女なの！？」」

非常に動揺していた。
無理もないだろう。
単なる噂でしかなかった魔法少女に自分がなるなど、誰が想像できるだろうか。
しかし、怪物はそんな少女を見逃すほど慈悲深いというわけではなく、少女に向かって突進して来た。

？？？「危ない！！」

なのは「きゃああ！！」

無意識に杖を正面に向ける少女。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

かつて、上条当麻をトラックから守ってくれたフェイト・テスタロッサが使用していた物と同質の壁が、少女の目の前に発生する。
怪物が魔力で作られた壁に激突する。
しかし、その壁は非常に頑丈らしく怪物の攻撃を全く受け付けない。
怪物の身体が削られて、周囲に飛び散り、様々な物を破壊するが、今の少女にそのことを気にしている余裕はなかった。
再び怪物の身体が再生していく様を見て、恐怖するなのは。
その隙を見逃さなかった怪物は、不完全に回復した身体で少女に突進してきた。
しかし、怪物の一撃は少女に当たることは無かった。

バキン！！

当麻「高町さん…大丈夫…？」

なのは「か…上条君！？」

意識を取り戻した少年は、怪物と少女の間に割り込み、右手を突き出して少女を怪物の攻撃から守っていた。
しかし、先程少年が受けた怪物の攻撃は思った以上に強烈だったらしく、少年は所々出血していた。

なのは「上条君…血が…」

当麻「僕なら大丈夫…」

???「あれは魔力の塊なんだ！　物理的な攻撃じゃ駄目なんだ…魔力を減らすとかして力を弱らせてからコアを封印しないと…！」」

なのは「私なんかに出来るのかな？」

当麻「大丈夫…きっと…高町さんなら…」

怪物の攻撃を受け止めている少年の声を聞いた少女は、決意した。
そして、少女は目を閉じる。
自分の呪文を見つける為に…
程なくして、少女はその呪文をみつけた。
高町なのはは瞳を開ける。彼女に最早迷いは無かった。

「『リリカル、マジカル……』」

「封印すべきは、忌まわしき器『ジュエルシード』！」

「『ジュエルシードを、封印！！」

『Ｓｅａｌｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ．Ｓｅｔ　ｕｐ』

なのはの杖から強烈な光が発生して、その光は怪物に直撃する。
その光は怪物を包み込み、少しずつ怪物の身体が崩壊していく。
そして、怪物の眉間にローマ数字が出現した。

???「今だ！」

フェレットの言葉に少年は、最後の力を振り絞りその場から離れた。
なのは「ジュエルシード、封印！！」
『Ｓｅａｌｌｉｎｇ』
怪物の身体は更に崩壊していき、やがてその身体は完全に消滅して、
その場には宝石が残っていた。
？？？「……早く、杖であの宝石に触れて…」
なのは「あ……うん」
フェレットの言葉に従い、なのはが杖の先端の赤い宝石で、それに
触れると青い宝石に吸い込まれていった。
しかし、変身を解除した少女の災難は、終わることが無かった。
？？？「巻き込んでしまって…ごめん…なさい…」
当麻「なんとか…なって…よかった…よ…」
意識を失ったフェレットと上条当麻。
なのは「ふ…二人とも…！！」
どうしていいかまったく分からず、動揺するなのはの前に…
桃子「なのは？」
なのは「ま…ママ！？」

家を勝手に抜け出したなのはを探しに来ていた、母親の桃子がその場に居た。

その頃、結標真紀は端末の様な物で何者かと連絡を取っていた。

真紀「ええ…ロストロギアの反応は未だに見られないわ」

???「…」

真紀「分かっているわ。あれがどんなに危険なものなのか」

???「…」

真紀「それじゃあね」

そう言って、彼女は携帯端末の電源を切る。

真紀「全く…職務熱心なのは悪くないけど、堅物過ぎるのも悩みものね…」

彼女の前には一人の女性が立っていた。

真紀「この間の魔術師といい…あなたといい…この町に何かあるのは確実なんだけどね」

正面の女性は杖の様なものを構える。

そして、大量の魔力弾を少女に向けて発射する。

ドォン!!

真紀「穏やかじゃないわね…」

先程とは全く異なる場所に移動していた結標真紀は、小型の機械を取り出す。

真紀「フェンリル」

『Ｓｅｔ　ｕｐ』

少女の服装が変化する。

しかし、彼女の姿はフェイトやなのはの様な魔法少女を彷彿とさせる様な服装ではなく、どことなく機械的な印象を与えていた。

真紀「生憎『これ』には非殺傷設定なんて便利な機能はついてないから、死んでも気にしないでね～」

???「!?」

女性の両手両足が、光の輪の様な物で拘束される。

真紀「ちなみにそれ…ただのバインドじゃないからね～」

バリバリバリ!!

輪から発生した電撃が女性を容赦なく襲う。

???「!!!!」

そして…

ドサッ！！

真紀「全く…海鳴も物騒になったわね…まぁ…学園都市ほどじゃないけど…」

結標真紀はそのまま自宅に向けて帰って行った。

その頃…

フェイト「アルフ…そっちは…？」

アルフ「駄目だ…どこにもいない…」

フェイト「当麻…一体何処に行ったの？」

第9話　大切な約束（前書き）

第9話　大切な約束

当麻「ここ…は…？」

先程、自分が居た場所とは異なり、目が覚めた少年の視界に入ったものは見たことも無い光景だった。

桃子「目が覚めた？」

上条当麻に声を掛けたのは、高町なのはの母親である高町桃子だった。

当麻「高町さんの…お母さん？」

桃子「少し待っててね」

そう言って高町桃子は、部屋から出て行く。

当麻「あれから、一体何が…」

少年は自分の体を見る。
体には包帯が巻いてあった。
どうやら、高町家の人が治療してくれたらしい。

当麻「高町さんに迷惑掛けちゃった…」

当麻は迷惑を掛けたことに対する罪悪感を感じていた。
それから少し時間が経ち、高町なのはが部屋に入ってきた。

少女は、その腕にフェレットを抱きかかえていた。
ちなみに、高町桃子はその場に居なかった。
なのは「上条君…体は大丈夫？」
当麻「うん。迷惑掛けてごめんね…」
なのは「ううん。私のせいで上条君が怪我したんだから…」
当麻「そんなことは…」
なのは「本当に…ごめんなさい…ひっく…」グス
当麻「高町さん」ポン
なのは「え？」
当麻「僕が勝手にやったことだから、高町さんが気にする必要は無いよ」
なのは「でも…」
当麻「それに、高町さんがいなかったらこの程度じゃ済まなかったと思うしね」ナデナデ
なのは「う…」
当麻「だから、高町さんが気にする必要はないんだよ」ナデナデ
なのは「う…うん／／／」

なのはの頭を撫でながら笑顔で語りかける当麻。

???「怪我は大丈夫かい？」

当麻「うん。君はどうなの？」

???「余った魔力を回復に使わせてもらったから、僕は大丈夫だよ」

フェレットの体の傷は殆ど無くなっており、少年は軽く驚く。

当麻「良かった…」

???「巻き込んでしまってごめんなさい…」

当麻「気にしないでよ。僕が勝手にやったことだから」

???「…」

当麻「それにしても…君は一体…喋るフェレットなんて初めて見たけど…」

???「それは…」

フェレットは、自身の正体と目的を二人に語る。
フェレットの名前は、ユーノ・スクライアと言った。
ジュエルシードと呼ばれる宝石は、元々彼が居た世界に存在するもので、発掘作業を行っていた彼が偶然掘り起こして、別の世界に散らばってしまった物らしく、彼が一人で回収作業を行っているとい

う話だった。
二人にその話をするときのユーノの表情は暗かった。
恐らく、自分自身の問題に魔法とは全く関係ない人間を巻き込んでしまった罪悪感があるのだろう。
なのはは、別世界の問題を聞いて驚きを隠せなかったが、当麻はフェイトと既に出会っているため、そこまで驚くような話でもなかった。
一連の話が終わり、少年は大切なことを思い出した。
当麻「高町さん。電話借りてもいいかな？」
なのは「え…？う、うん。構わないけど…」
少女は少年を電話の場所を教えて、少年は電話を掛ける。
彼が連絡した先は、現在彼が住んでいるマンションに向けてのものだった。

『マンション』

一方その頃、フェイト・テスタロッサとアルフはマンションに帰っていた。
上条当麻を探していた二人だったが、結局少年を見つける事が出来ず、アルフに少年がマンションに帰っているのかも知れないと言われたフェイトは、一旦マンションに戻ることに決めた。
しかし、マンションに少年は帰っておらず、再びマンションを出て少年を探すことを決めた二人だったが…
Ｐｒｒｒｒ！！
フェイト「電話？」

アルフ「こんな時間に誰なんだ？」
不審に思いながらも、受話器を取るフェイト。
フェイト「どなた様ですか？」
当麻「もしもし…フェイト？」
フェイト「当麻！？」
アルフ「当麻なのかい！？」
驚く二人だったが、少年から何があったのか説明される。
ジュエルシードの暴走によって生まれた怪物に襲われて気絶して、
クラスメートの子の家にお世話になっていることらしい。
当麻「ごめんね…迷惑掛けて…」
フェイト「ううん…当麻が無事でよかった…」
当麻「それじゃあね…」
フェイト「うん…」
通話が終了してフェイトは受話器を置く。
フェイトとアルフは当麻と別行動を取っていたことを後悔していた。
もし、その場に自分がいれば少年が怪我をすることがなかった。
フェイトはそのことに心を痛めていた。
フェイトとアルフに連絡を終えた少年は、再び部屋に戻った。

ユーノ「連絡は終わったの？」

当麻「うん。高町さん。手間掛けさせちゃってごめんね」

なのは「ううん。気にしないで」

当麻「それじゃあ。僕は帰るから」

なのは「え？」

当麻「あまり長居するわけにもいかないだろうし」

なのは「で…でももう夜中だし…」

桃子「なのはの言う通りよ上条君」

高町桃子が部屋に入ってくる。

ユーノは、話している所を知られるわけにはいかない為黙っていた。

当麻「で…でも…」

桃子「それに夜中は何かと危険だからね」

当麻「迷惑を…」

少年が言い終える前に、高町桃子が上条当麻を優しく抱きしめる。

桃子「無理しなくていいのよ…」

抱きしめられて驚く少年だったが、懐かしい感覚を思い出し、そのまま眠りについた。
翌日、本日は小学校が休日ではなかったのだが、なのはの両親が学校に少年が休むとの連絡を入れてくれた。

当麻「本当にありがとうございました」

桃子「本当にいいの？無理しないほうがいいわよ？」

当麻「大丈夫です」

少年は結局、高町家で泊まった後にマンションに帰る事にした。

桃子「気をつけてね」

当麻「はい」

マンションに帰宅した少年は、フェイトとアルフに再開する。

フェイト「当麻！」

アルフ「大丈夫かい！？」

当麻「うん。迷惑掛けてごめんね」

フェイト「ううん…私がしっかりしてれば…」

当麻「そんなことないよ」

アルフ「当麻の言うとおりだよフェイト。当麻も無事だったんだし」

フェイト「そうかな…？」

場の雰囲気を切り替える様に、上条当麻はフェイトとアルフに一つの頼みごとをする。

当麻「いきなりだけど、二人にお願いがあるんだ」

フェイト「お願い？」

アルフ「なんだい？」

当麻「僕に戦い方を教えて欲しいんだ」

「「え？」」

予想外の申し出に動揺するフェイトとアルフ。

当麻「二人の足を引っ張りたくないんだ。それに…」

フェイト「それに？」

当麻「フェイト達に無理して欲しくないから…」

厳密には、フェイトとアルフだけではなく、高町なのはとユーノ・スクライアも含まれていた。
ジュエルシードの問題を、同じ年の少女に任せることは少年にとって我慢出来ないことだった。
だからこそ、少年は彼女達の負担を軽くする為に二人の少女に戦い方を教わることを決めたのだ。

強い決意を宿した少年の瞳を見たフェイトとアルフ。

フェイト「分かったよ。だけど今日は休まなきゃ」

アルフ「そうだよ。この状態じゃ戦い方を教えることなんて出来ないよ」

当麻「うん」

二人の言葉に従い、本日はマンションで休養を取ることにした上条当麻だった。

その頃、浜面仕上は海鳴市をぶらついていた。

仕上「暇だな～」

今日は、上条当麻が休みということもあり、当麻を誘って遊びに行くつもりだった浜面は暇になったのだ。

仕上「なんか面白いモンでもないかな？」

少年が海鳴の公園を通りがかった時、公園のベンチに目を開けたまま、微動だにしない少女の姿を見つけた。

仕上「何やってんだあいつ？」

明らかに目立っている少女を見つめている浜面だったが、少女の体が少しずつ傾いていき…

ドサ！！

仕上「お、おい！？」

少年は慌てて少女の下に駆け寄る。

仕上「大丈夫か！？」

少女に声を掛けるが、返事は無い。

救急車を呼ぶ為に、急いでその場から離れようとしていた少年だったが…

？？？「グー…スカー…ピー…」

仕上「グースカーピー？」

再び少女に近づく。

仕上「何だよ…寝てるだけじゃねぇか…」

拍子抜けした少年は盛大な溜息をつく。

少年の溜息で目が覚めた少女は、寝ぼけ眼で周囲をキョロキョロ見回して…

？？？「南南西から電波が来てる…」

仕上「はぁ…？」

少女が話している内容が全く理解できない浜面仕上。

？？？「あなたは？」

少年に気付いた少女は、少年の顔をじ～っと覗き込む。
仕上は内心ドキドキしながら、少女の質問に答えた。
仕上「お前が意識を失ってると思って近づいたんだよ。救急車を呼ぼうとしたら、寝てるだけだったとは思わなかったけどな…」
???「そう…」
仕上「そういや…ここらじゃ見ない顔だけど…」
???「私は…海鳴に来るのは初めてだから…」
仕上「そうなのか…よし！！」
突然何かを思いついた少年は、少女の方を向いて笑いながら。
仕上「ならこの俺が海鳴を案内してやるよ！」
???「いいの…？」
仕上「かまわねぇって！そんじゃあ行こうぜ！！」
少年は少女の手を握り、その場から駆け出した。
少女の名前は滝壷理后と言った。
それから、少年は少女の海鳴を案内していた。
案内というよりはデートに近かったが、二人ともデートという認識はこれっぽっちもなかった。
少年が案内した場所は、ゲームセンターや翠屋などだった。
ゲームセンターで遊んだ際に、少年はＵＦＯキャッチャーをして馬のぬいぐるみを取って少女にプレゼントした。

翠屋に到着した際は、高町家の人々にニヤニヤされながら見られていた。
少女は基本的に無表情だったが、少年に案内されていたときは、少しばかり笑顔が見えた気がした。
少年も最初は、単なる暇つぶしのつもりだったが少女と一緒にいる時間を楽しいと感じていた。
再び二人が出会った公園に戻った。
浜面仕上は滝壺理后と一緒に居るうちに様々な話を聞いた。
少女は学園都市に向かう途中で、海鳴市に立ち寄ったらしく、公園で昼寝していたときに少年と出会ったらしい。
学園都市に憧れを持っている少年だったが、この前に高町なのはと月森すずかから聞いた話を思い出す。
学園都市に行ったら、学園都市の外に出るだけでも大変な手続きが必要になるということ。
超能力という物を手に入れるために脳を開発するということ。
一緒に遊んだ少女が、そんな遠い場所に行ってしまうことを実感する。

理后「そろそろ行かなきゃ…」

仕上「そうか…」

理后「今日は楽しかったよ。ありがとうはまづら」

仕上「俺も楽しかったよ。ありがとな滝壺」

理后「じゃあ…さよなら…」

少女は少年の下から立ち去っていく。
どんどん離れていく少女の後姿を見ていた少年は、全力で叫んだ。

仕上「またな！！また遊ぼうぜ！！滝壺！！」

少女の足が止まり、少年の方を向く。

理后「ありがとね…はまづら…またね…！」

滝壺理后の姿が見えなくなっても、浜面仕上は手を振り続けていた。

第１０話　少年の特訓

『私立聖祥大附属小学校』

仕上「はぁ…」

当麻「浜面？どうしたの？」

アリサ「朝からこの調子だから放っておいたほうがいいわよ」

溜息をついている仕上を心配した当麻が声を掛けるが、アリサに止められる。

当麻の言葉に反応しない少年だったが、仕上が溜息をついている理由は先日、彼が出会った滝壺理后という少女が原因であった。

すずか「でも…浜面君、一体どうしたんだろうね？」

アリサ「さぁ…浜面が何考えてるかなんて分かるわけないでしょ」

なのは「体調でも悪いのかな？」

当麻「どうなんだろう？」

なのは「そういえば…上条君。身体は大丈夫？」

当麻「大丈夫だよ。ありがとう高町さん」ニコ

なのは「う…うん…／／／」

少女の顔が少しばかり赤かったが、鈍感な少年がそのことに気付くことはなかった。

仕上「学園都市かぁ…」

すずか「学園都市がどうしたの？」

アリサ「学園都市にでも行きたいわけ？」

仕上「まぁ…会いたい奴がいるんだけどさ…」

当麻「学園都市に友達でも居るの？」

仕上「まぁな」

なのは「そうなんだ」

浜面仕上の友人が学園都市に居るということを始めて聞いた一同だったが、それほど興味があるわけではないのか、その事について言及する気は無かったらしい。

子萌「学園都市がどうしたんですか～？」

学園都市の話をしていた少年少女達の下に、担任の月詠子萌がやって来た。

なのは「浜面君の友達が学園都市に居るという話をしていたんですよ」

子萌「そうだったんですか。もしかしたら、先生が浜面ちゃんのお友達に出会うかもしれませんね」

上条「子萌先生は学園都市の先生でしたよね」

子萌「そうなのですよ～」

アリサ「先生以前に大人っていうのが納得できないけどね…」

すずか「ア…アリサ…」

子萌「だから～私はれっきとした大人なのですよ～！」

アハハ！！

何気ないやり取りをして、平凡な一日を過ごす少年達と少女達。

『マンション』

授業が終わって、上条当麻は早速マンションに帰った。

今日は、フェイトとアルフに戦い方を教えてもらうと約束した日だった。

当麻に戦い方を教えると約束したフェイトとアルフだったが、少年用のデバイスなど所持していなかったし、少年が自分達のように戦えるわけではないと理解していた。

ゴーレムと対峙した時の服装になっているフェイト。

ちなみに、少女が身に纏っている服装はバリアジャケットと言うらしい。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

少女は魔力で構成された障壁を作り出した。

フェイト「当麻。右手であの壁に触れてもらってもいい？」

当麻「うん」

フェイトが何故いきなり障壁を作り出して少年の右手で触れるように指示したのかと言うと、それは、ゴーレムと戦った際に少年の右手がゴーレムに触れた際に、ゴーレムの身体の崩壊したことからなんらかの魔力を打つ消すことがあるのではないかと推測したからだ。少年の右手が障壁に触れた途端…

バキン！！

ガラスが割れる様な音が周囲に響き渡り、障壁は跡形もなく消滅した。

当麻「え？」

アルフ「バリアが消えた？」

少年は、ゴーレムやジュエルシードの暴走によって生まれた怪物との戦いでも右手を無意識に突き出していたが、自分の右手にこのような力が宿っているとは知らなかったのだろう。

フェイト「（やっぱり…）」

少年が障壁を打ち消した場面を見て、フェイトは一つの確信をする。

フェイト「当麻とアルフが握手してもらってもいいかな？」

アルフ「ああ」

当麻「うん」

フェイト「言い忘れていたけど、当麻は右手で握手してね」

当麻「分かったよ」

ガシッ！

アルフ「あれ？何だか力が抜けていく？」

フェイト「もういいよ」

アルフと当麻は握手をやめる。

フェイト「もう一度握手してもらっていいかな？当麻は今度は左手でお願い」

再び握手をする二人。

フェイト「アルフ。何か違和感みたいなものはある？」

アルフ「いや…無いけど…」

当麻「どうしたのフェイト？」

アルフと握手させた意図が分からず、質問する当麻。

フェイト「多分なんだけど…当麻の右手には魔法の力を打ち消す力が宿っているんだと思う」

当麻「魔法を打ち消す力？」

アルフ「それって…ＡＭＧ（アンチマジックグローブ）みたいな物かい？」

フェイト「そうだと思うけど…」

当麻「そんな力があるなんて…」

自分の右手に魔法を打ち消す力があることに驚きを隠せない少年。
しかし、右手にその力が宿っていなければゴーレムの戦いで確実に命を散らしていた。
それが、少年にとっての幸運か不幸かは誰も知る由がない。

フェイト「じゃあ早速、特訓を始めるけどいいかな？」

当麻「うん。よろしくお願いします！」

特訓の内容は、フェイトが放った魔力弾を打ち消したり、アルフに近接戦闘を習うといったものだった。
少年が特訓をしている頃、高町なのははユーノ・スクライアと一緒に海鳴市を歩き回り、ジュエルシードの捜索を行っていた。
ユーノの話を聞いたなのはは、彼に協力してジュエルシードの捜索に当たることを決めた。

なのは「（見つからないね…ジュエルシード…）」

ユーノ「（そう簡単に見つかるような物じゃないからね…）」

念話で会話する二人。
喋るフェレットと会話している所を、見られるわけにはいかないのでこのような形で会話することになった。

なのは「見つからないなぁ…」

真紀「どうしたの君？」

なのは「え？」

困っている様子の高町なのはに声を掛ける結標真紀。

真紀「何か困っているようだったから…」

なのは「にゃはは。すいません。大した事じゃないんです」

真紀「そう？ならいいけど…」

なのは「心配してくれてありがとうございます」

真紀「いえいえ。困ったときはお互い様だからね」

結標真紀と別れる高町なのは。

真紀「（あれは…念話か…あの子は…）」

それから、ある程度の時間が過ぎて高町なのははジュエルシードによって、怪物化した犬と戦っていた。

始めの頃に比べて、スムーズに変身できた上に順調にジュエルシードを封印することが出来た。
そんな少女の様子を離れたところから見ている真紀の姿があった。
真紀「あの子も魔道士か…全く…厄介な事になりそうね」
ヒュン！！
音も無くその場から消える結標真紀だった。
翌日、上条当麻のマンションに少年宛に差出人不明の手袋が送られて来た。
フェイトとアルフにその手袋を見せる当麻。
当麻「これってどういうことなんだろう？」
アルフ「何で右手用だけしかないんだよ…」
当麻「誰が送ったのか全然分からないし…」
フェイト「もしかして…この手袋を送った人は当麻の右手について何か知っている人なのかもしれないね」
当麻「そうなのかな？」
アルフ「確かに…そうじゃなきゃ右手用しかない手袋なんてただの嫌がらせだろ？」
当麻「そうだね…」
フェイト「でも…誰が何の為に…」

アルフ「それは分からないけど…とにかく、せっかくだから試してみようよ！」

アルフの提案に乗った当間は早速、手袋を着けてアルフと握手する。

アルフ「やっぱり…力が抜けない…」

手袋を着けている状態だと、少年の力が発動しないことを理解した一同。

しかし、誰が何の為にこの手袋を送ったのかその理由が分かる者はその場に居なかった。

その頃…

???「うう…お腹が超空きました…」

一人の少女が海鳴市をうろついていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3166y/

とある魔法少女と不幸な転校生

2011年12月7日11時55分発行